

みひとひら原金

かねはら
金原

恋と人の関係性について 試験紙

2021.6.5
新井洋介

恋愛はコロナ禍の中での「聖域」であるはず。私は、そう思っていました。さまざまなことがオンラインに切り替わり、「人に会うな」「マスクをつける」と言われるなかでも、恋愛相手となら、直接触れあうことが許されるはずだと。

でも実際には、家族だけが「聖域」と考える人が多かった。2020年5月に発表した小説「アンソーシャルディスタンス」には、恋人と出かける息子を批判する母親が出てきます。「家族とは密に接してもいいけど、それ以外はダメ」という趣旨です。カップルと、大人になつた息子と母、どちらの方が互いにどうて近しい存在なのか。人によってこの解釈には大きな差が出ることを、私も痛感しています。

コロナ禍の中での恋人たちの物語を、二つ紹介しました。人間の何がが変わったわけではないのに、突然激変してきた新型コロナによって、家族や恋人との関係性が変わってしまうことがある。その現実に直面したからです。

緊急事態宣言下の5月に出した最初の作品には「コロナなんて自分たちには関係ない」という若いカップルが出てきます。コロナで騒いでいる社会にいる自分たちは、ゾンビの世界に迷い込んだようなもの。感染する不安よりも、好きなタイプが中止になつた絶望感で「死にたい」という気持ちにさせられる。ある種の人々にとっては、生きていくために「生きていく」以外の何かが必要なんです。

セックスはオンラインではできません。人との接触が「悪」とされる中で、彼らはセックスをし続けます。オンラインで代替することが新しい社会のあり方だという空気のなかで、私はセックスに引きずられる人たちのことを、いまこそ書きたい、と感じました。芸術や映画、ライプ。生きるためにそれがどうしても必要だ、という人もいれば、不要不急と思う人もいる。大切にしてきたことが禁止された人たちの苦しみは、計り知れません。

私自身の中にあつた、閉塞感への反発が、この小説に向かわせたところもあります。社会全体がコロナをおそれ、正し

1983年生まれ。デビュー作「蛇にピアス」で2004年の芥川賞を受賞。20年、文藝誌「新潮」に「アンソーシャルディスタンス」と「テラノブレイク」を発表。エッセイ集に「パリの砂漠、東京の蜃気楼」。II追和義撮影

さの圧力が強まるなかで、「みんなが苦しい思いをしないといけない」という社会への慣れを、まだ失うもののない若者の視点で描きたかった。

人を狂わせるような熱量で書いかつてくる「正しさ」のなかで、恋人との関係が変わるものもいます。12月に出した小説では、コロナへの不安が大きすぎて恋人と会えなくなった女性を描きました。5月の「コロナなんて関係ない」という主人公とは正反対です。恋人が外に飲みに行くのがムリ、自分に触れる前にお風呂に入つてくれないとムリ。

いろいろなムリのなかで恋人と会えなくなつた時、彼女は恋人と自分を映したセックス動画を見る中に夢中になります。動画が生きる支えになつていく。久しぶりに会えた時さえ、動画を振ろうと必死になる。彼女にとって、彼氏は慈しむような存在ではなく、「自分を支えるためのもの」でしかなかったことが露呈しました。

そして、好きなはずの相手と本当の意味では関わつていなかつた、と気付きます。そもそも、人と関わるとはどういうことなのか、コロナ禍にこそ考えるべき問い合わせなのではないかと思います。

密に会えなくなった恋人や家族に対して、似たような感情を抱いた人は、少なからずいたのではないでしょうか。悪い面ばかりではない、と私は思っています。「会えなければ意味がない」というのであれば、会うことで自分は何を得ていたのだろうか。そんなふたんは気付かないことを考る新しい思考回路が生まれたと思います。

より親密になつた人もいれば、別れた人もいる。コロナは「この恋愛は本当に大切なもののな」を問うトマス試験紙のような役割も果たしているように思います。

(聞き手・田中聰子)